

原始仏教における loka について (II) (橋 本)

原始仏教における loka について (II)

橋 本 哲 夫

原始仏教内には種々のローカ (loka) が見られるが、今回は、*ayam loka*, *para loka*, *Brahmaloka* *sadevako* (Sn. 1117) とローカを四種並べることの意味を考究する。その際、J. Gonda 氏の論文を参考にする。

まず、*ayam loka* であるが、これは「安全な所」「力との接点」(AV. 9-5-7; 11) であらう「地上世界」(AV. 8-1-4: *bhuloka*) であらう *yama loka*, *devayana* に対比する (AV. 12-3-3)。さらにそれは *parama loka* と明確に区別される (AV. 19-5-5) が、両者は共にブラフマンを手段としてカーラ (時間) に克服される (AV. 19-5-4-6) ので、後世の注釈家達の言をきくまでもなく、*parama loka* は実質的には *para loka* である。

para loka は又 *idam* (= *bhuloka*)、第三の世界 (*itthya*: *para loka* に対する世界) と対比して言われる (AV. 6-11-7-3)。第三の世界は同所での神道・祖道への言及からしてブラフマローカではないかと考える。とすれば、*idam*, *para* の両者はブラフマローカを除く全ての世界である。両者は又 *idam*, *adas* でも示される (AV. 12-5-38 etc.)。

このような世界の二分割は Sb. 13-2-41 で明瞭となる。コンダ

氏の表現に従えば、*ayam loka* = *manuṣya loka*, *para loka* (*para-loka*) = *devaloka* = *asura loka* (= *yonder world*) となる。もちろんこれらの等号は完全ではないが、つまりはブラフマローカを除いた全てのローカがこの二語で示されているようである。

そして、この事態はウパニシャッドにおいて顕著となる。*idam*, *para* の両者はウリハット⁽¹⁾＝ブラヌヤカ⁽²⁾＝ウパニシャッドの四所に殆んど同じ形で現れる——*ayam ca lokah paraśca lokah sarvāṇi ca bhūtāni* (3-7-1; 2; 4-1-2; 4-5-11)°。この二のローカは *sarva bhūta* (全ての存在) の容器とみなして良いであろう。さらにそれらはアトマンの吐き出したものである (4-5-11) ので、この二のローカで、ブラフマローカ以外の全てのローカが意味されていると考える。このような宇宙の二分割の伝統が仏教内で、*ayam loka*, *para loka* の表現で残っていると考える。

さらに、全てのローカは AV. 10-9-10 等 *antarikṣam* (中間界)° *divyam* (天)° *bhūmin* (地)° *adityān*, *maruto*, *dīśāḥ* と並び称される。この全てのローカが具体的に何を指しているかは異同があるが、AV. 12-3-20 *trayo lokah* が天・地・中間界を意味していることから、この三つのローカが形式化して全てのローカを意味していると推測する。この様式は Sb. にも見られる (2-3-23 etc.)。さらに他の三分割 *pitrloka*, *devaloka*, *manuṣya loka* (TB. 2-1-8-1; BĀU. 3-1-8)°。それらはコンダ氏によれば世界の空間性の不完全さを示していることになるが、いずれにしても、このような三分割法は総体的に見た場合、テキストの範囲内では仏教に反映している。三分割のキーワードたる中間界 (*pālī*: *antarikṣha*) は Sn. 222; 688. Dh. 127 に見られるが、Sn. 222 では地

とセットとなっており、他は日常的な「空中に」という意味である故に、それらは三分割を背景とした用法とは考えられない。テキスト内での三分割は天 (divya) / 人 (manusaka) / 梵天 (brahman) (Sn. 524; 525) である。

全てのローカの分割法は、右の二分割、三分割以外に、多分割とでもいべき形式がある。AV. 9-6-59 ではローカは地、中間界、神々の四である。JB. 1-333 では、ブラフマンのローカを含むローカが挙げられている。KB. 20-1 には devaloka, pitrloka, brahmaloka 等の九のローカが言われる。数が一定していないのはローカの複数形が無限定数を示す事情があるからであろう。ここで注意すべきは、「ブラフマローカに在る神々はアートマンに対する瞑想によって全てのローカを手に入れた。」(ChU. 8-12-6)「全てを捨てたサンニヤーシンによって獲得される高次の知によって諸ローカとそれらの住人を統一するブラフマンに至ることができる」(ChU. 2-2-2)「全てのローカはブラフマンに征服される」(AV. 19-5-46)と言われる点である。これらの表現は、「ブラフマローカが神々のローカの一つではなく、それらを越えるものであることを示している。つまり、全てのローカは「ブラフマローカ」とそれ以外の神々のローカとに二分されるということである。Sn. 1117 の brahma loka sadevavako はこの事情を受けた表現であり、この二語で全てのローカが表示されていると考える。

こゝで 'ayam loka・paro loka と brahmaloka・sadevavako の関係を述べる。テキスト内では 'devamanusajoka も多く見られるが、テキスト内での三分割は、天・人・梵天であり、idam, para はブラフマローカ以外のローカの二分であったので idam = ma-

原始仏教における loka について (Ⅱ) (橋 本)

nussa, para = deva となる。この時点では Sb. B-2-41 と同じであるが、ここにブラフマローカが参入し、前二者が sadevavaka (loka) と一括して呼ばれるようになったのではないかと考える。そしてその結果 'idam = sadevavaka loka' para = brahmaloka とする見方も生じたのではない。事実、AN. IV, p. 270 の para loka は中村氏によれば、究極の境地であり、SN. I, p. 235 G では asmin loka sadevake という表現が見られる。つまり、神々の世界の地位低下が見られる。さらに、Sn. 1117 では、ブラフマローカの人々ですら、仏の理解を知らないとし、ブラフマローカの地位も低下している。このように、仏教徒にとっては、個々のローカが何であるよりも、全てのローカを同質とする考えが重要であったと考える。Sn. 135 の sabrahmaka loka という表現がそれを示している。そしてこの考えは 'sarvaloka を経て一語の loka へ続いて行く。

テキストはスッタニパータ、テラー・テリリー・ガーダ、
ダンマパダ

1 J. GONDA: Loka-world and heaven in Veda

2 idam loka は全ての業がなされる所 parama loka は業の結果が取得される所。

3 前出書八十四ページ。

4 同書五十四ページ注(1)、(3)。

5 中村元「原始仏教の思想」上巻、三百二十七ページ。

6 スッタニパータ一七十七の「この世」「あの世」の意味が、注釈では確定していないこともその結果であろう。

(種智院大学講師)